

環友 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪璃集	27
紅玉集	30
俳誌交歓	31
8月号月評	32
恵贈句集拝見 (62)	34
(63)	36
恵贈俳誌拝見 (31)	38
特別作品「沿岸急行船の旅Ⅱ」	40
「ポジティブな亡夫」	42
琥珀集作品鑑賞	44
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	45
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	46
瑪璃集紅玉集作品鑑賞	47
他誌転載	50
妣の国父の蒼天 (53)	52
醍醐寺・随心院吟行	54
エッセイ「六月の猛暑」	56

今月の一句

冷房がまづ身を透る原子館

桂樟蹊子

(昭和六十年作)

浜岡原子力発電所を訪れたときの作品である。その展示場のドアを押した瞬間、冷房のひやりとしたのを「身を透る」と感じられた。そうして私どもはそろそろ原子力に入って行く句があつてもいいのではと感じられたようである。3・11以後の発電所の様を、師なれば如何に感じ如何に詠まれたであろうか……。

隆子

かたつむり

塩路隆子

筆 簞の音色と聞きぬ草の笛
運慶像の壁の翳りや薫風裡
袋角に触れて仏のあたたかさ
原始林化石のごときかたつむり
水神の祠離れず恋蛭
運命線伸びたる心地みどりさし
呻くかに月赫き夜の墓

八月号光耀抄

桑の実や小川あたりの遊び場所
王手てふ声緑蔭にひびきけり
馬上より放つ鏑矢青葉風
中国茶運ぶ少女の麻の服
近江路の日照雨に馴れて漏刻祭
陽を浴びて命は影にあめんぼう
生れきし仔鹿立つこと躊躇はず
馬並めて勅使行列賀茂祭
好物は鮎の飴炊き湖国住
潮騒の「浜のかあちゃん」焼鮑
睡蓮の咲きて千古の池目覚む
ひたすらに早苗饗念仏木魚音
旅宿に夏の満月午前二時
陶枕や夢の続きのセピア色
先行を一気に躲し競走馬
青葉風龍神村の美人の湯
あめんぼの数だけ波紋広がりぬ
雨上り小岩ひと跳び青蛙

塩路 隆子選

宮田 香
阪本 哲弘
西垣 順子
木戸 宏子
山田 愛子
中井 弘一
笠井 清佑
山口 キミコ
竹内 悦子
鈴木 照子
伊東 和子
松岡 和子
三川 美代子
和田 郁子
和田 森早苗
山崎 里美
石川 かおり
伊藤 和子

梅雨籠ハードカバーの本抱へ
 空豆のはしりを少し酒の卓
 伸ばす手に寄る振り見せて恋蚩
 風薫る砥部焼の里大水車
 暴れ性秘めて平穩梅雨の川
 殺生の悔いは毛虫の一匹目
 ひっそりと円空の墓ほととぎす
 吹抜けのある安土城風涼し
 五月雨や大河に架かる鉄の橋
 梅雨兆す川辺に鷺の影ひとつ
 ここからは単線の旅合歓の花
 夏草に屋根取られたる登り窯
 まくなぎをとぼけ羅漢の貌で追ふ
 水乗りの術皆伝の水馬
 白鷺のけふも定位置餌を狙ふ
 手仕事に費やすひと日夕簾
 跳びそこね浮葉の裏の雨蛙
 湯上りや昭和の香る天瓜粉
 筒鳥や南部こけしは素地のまま
 五月雨に新装オープン傘の店

伊藤純子
 大島みよし
 小澤菜美
 片岡久美子
 北尾章郎
 国包澄子
 坂上香菜
 坂根宏子
 笹井康夫
 塩路五郎
 杉本綾
 中井登喜子
 中村ふく子
 中本吉信
 能勢栄子
 橋本靖子
 宮崎左智子
 小林久子
 田下宮子
 森下康子

狩野派の虎の咆哮夏来たる
 六月が新聞受けの中にある
 ガス灯や青葉若葉の異人坂
 三十六峰うねりて若葉比叡まで
 瀬戸内を望みて酌めり地焼酎
 表札は変はれど今も山法師
 水甕に門跡院の目高かな
 緑蔭の都会オアシス石畳
 柿の花落ちて見上ぐる夕日かな
 毛虫にも五分の命や葉を喰める
 練りし香に姑との日々や麦こがし
 バীগマンのその名の深紅大薔薇
 空梅雨やてるてる坊主黒にして
 神山の風に靡くや懸り藤
 盆石の涼しく描く小宇宙
 羅の透けても見えぬこころ内
 清盛の夢のわだつみ青葉潮
 五月晴何か干したき日差しかな
 二百種の薔薇それぞれ矜持かな
 颯々と歩く白鷺夏兆す

井口 淳子
 常田 希望
 辻 知代子
 谷口 俊郎
 山本 孝夫
 吉田 宏之
 高谷 栄一
 川崎 利子
 山内 節子
 山内 夕力子
 山口 和子
 横田 矩子
 渡部 法子
 粟倉 昌子
 飯田 美千子
 板倉 安正
 伊藤 憲子
 伊藤 玲子
 大庭 玲子
 大松 一枝
 桂 敦子

あぢさゐ寺雨降らせてよ睨み龍
 長椅子に新しき窪梅雨に入る
 オクラ切る星がふつふつ生まれ来て
 賀茂の辺に泉州茄子のイタリアン
 古民家を売りますの札夏薊
 呼気吸気肺へ深々青葉風
 雑草を小舟のごとく青蛙
 樹脂工場脇の梅花藻繁茂せる
 知合ひの本屋閉店つばめの子
 山腹にめがね広告青葉風
 数寄屋造りの旅亭点在風薫り
 新緑に鳥居の映ゆる稲荷かな
 緑さす土塀に残る武士の影
 西日さす部屋の定席猫眠る
 淡海なる小鮎の苦味旨かりし
 ほのぼのとかる鴨親子列をなし
 万緑に吸ひ込まれゆくロープウエイ
 梅雨もよひわづかな反りの渡月橋
 古民家の庭に鈴生り桜の実
 黄金にたなびく近江麦の風

西郷慶子
 佐用圭子
 鈴木江奈子
 鷺見たえ子
 田中浅子
 田中久子
 辻香秀
 常田創
 十時和子
 中川すみ子
 長濱順子
 難波篤直
 西岡裕子
 西田史郎
 西村敏子
 秦和子
 福本すみ子
 藤本秀機
 増田一代
 宮越久子

琥珀集

王手

阪本 哲弘

風止みて児の髪撫づる鯉幟

和三盆の陳列透かし青簾

板長の飛ばすバリトン初鯉

打ち傷は日にち薬よ更衣

梅雨寒や葉のチューブみな歪み

蟻塚を匿ひみたる陶狸かな

王手でふ声緑蔭にひびきけり

新緑

宮田

香

鏑矢

西垣 順子

新緑の箕面に土蔵レストラン

目薬をさせば新緑滲みけり

トランプに足りないキング梅雨に入る

穀象の見つけてくれと動きけり

桑の実や小川あたりの遊び場所

太閤の城石を這ふ蟻の列

夏服の胸にのぞける木の十字架ケルマス

馬上より放つ鏑矢青葉風

斎王代の裸き手水にカメラ列

いにしへの雨乞ひの苑鎮もりて(神泉苑)

居並べる奉還人形薄暑光(二条城)

緑なす襲色目の桜の実

神苑の蓮の浮花水はじく

パリ時代のゴッホ絵巡り浅き夏

風薫る

木戸 宏子

堂前の献茶儀式や風薫り
青葉照る茶花も洋花紅茶席
緑雨来て移り香愛づる中国茶
中国茶運ぶ少女の麻の服
夏めく日鹿も木蔭に憩ひをり
半袖の肌に涼しや堂の内
「せんとくん」も更衣して奈良県庁

漏刻祭

山田 愛子

近江路の日照雨に馴れて漏刻祭
神官の祝詞とぎるる青時雨
青梅や駅舎の前の梅古木
捨火鉢沢瀉楚楚と咲かせをり
十葉や盛りの花に詫びて刈る
形代に頼む血圧変動値
小満の大音響や夜の地震

初夏

中井 弘一

はつ夏や風の色する帽子買ひ
陽を浴びて命は影にあめんぼう
子の夢を乗せてふはりと鯉のぼり
いにしへの書院ゆるりと若葉風
新緑の上にはずつと空の色
風薫る夫婦狸のふたり旅（信楽）
田植する嫗の水面天映す

南円堂

笠井 清佑

稻荷社に猫のうたたね五月鬮
生れきし仔鹿立つこと躊躇はず
古都巡る異国人へも梅雨しとど
大扉開け薫風入るる南円堂
活いきと胡瓜は蔓に力溜め
薫風を纏ひ安堵の世親像
急かされて包丁研ぐや走り梅雨

加茂祭

馬並めて勅使行列加茂祭

あまた人葵祭の役担ひ

滴りて京の水護る加茂御祖

腰輿待つ御苑の座席夏日影

諸鬘王朝人のさまにかな

下鴨へ続く行列薄暑かな

薫風に斎王代の笑みこぼれ

山口キミコ

嫁のれん

鈴木 照子

新樹光婚に受け継ぐ「嫁のれん」(砺波散居村)

越中の葉の話夏炉宿

はつ夏の波音届くすべり台

潮騒の「浜のかあちゃん」焼鮑

騎馬戦の先鋒一騎若葉風

水で育つ恐竜玩具早梅雨

ジェット風船上げて「ウル虎」夏来たる(甲子園)

燕の子

竹内 悦子

勧修寺

伊東 和子

好物は鮎の飴炊き湖国住

何事も嬰が優先薔薇開き

乳欲しき嬰の口して燕の子

少女期はお転婆でした梯姑咲く

齡重ねますます頑固花うばら

緑さす嬰の寝顔の天使なる

県庁に口ケ隊来る日青葉光

池巡る立札奥の蛇の道

勧修寺てふが里名や花菖蒲

杜若の池あかるきや観世音

観音の里はひと色山若葉

暮鳴くは氷室の池の主かも

睡蓮の咲きて千古の池目覚む

白築地映ゆるはつ夏勧修寺

夫の日

松岡 和子

陶 枕

和田 郁子

朗読のエプロンピンクゆすらうめ（ボランティア）

ひたすらに早苗饗念仏木魚音

無器用がひときは目立つ袋かけ

父知らず父の日祝ふ「夫の日」

山の幸若葉に盛りてふたり膳

若き日といふ昔あり著莪の花

笑まふ嬰の光纏うて聖五月

桐の花

三川美代子

五月の梅雨入

和田森早苗

旅宿に夏の満月午前二時

百選に入りたる棚田桐の花

麦の秋むかし学びし二毛作

チェリストはドイツ美人よ軽羅着て

向ひ家の風鈴の音に癒やさるる

梅雨晴間洗濯日和楽しみて

はや夏日日蔭求めて樟に倚る

か細くも存在感の紫蘭かな

羽蟻飛ぶアジトとなれる砂の山

おじぎ草小さな刺を蓄へて

カーネーションの花束さりげなく壺に

陶枕や夢の続きのセピア色

昔日の医院は更地梅雨しとど

雑草の中に翳せる蛍袋

麦秋の色に染まりし風渡る

先行を一气に躲し競争馬（第80回日本ダービー）

風紋を乱し五月の梅雨入かな

気持よく髪を纏めて梅雨の宿

手巻寿司と決めて青紫蘇摘みに出る

さざ波を刻む植田の昼餉時

岩燕鋭きターン繰り返す

青葉風

枝くはへ太嘴鴉青葉光
青葉風龍神村の美人の湯
緑蔭の気の漲れる高野山
返信を待つや一面姫女苑
夏の夜の一蹴決まる歡喜かな
冷汗の盲体験や初夏の街
母の日や遅れて届く赤き傘

あめんぼ

黴の香の古書肆に見つけ宝本
飛石に縞の木漏れ日蟻の列
川蜻蛉右に左に直角に
あめんぼの数だけ波紋広がりぬ
夏木立抜けてまつすぐ稲荷道
緑蔭の歯朶に包まれ虚子の句碑
竹落葉にまどろむ五百羅漢像

山崎 里美

青 蛙

伊藤 和子

峡奥にひとり田植の農婦影
山歩き夏鶯の道案内
嫋々と育つ早苗の風に勝ち
滝しぶく木蔭にひそと山紫陽花
水茄子を大樽三本山媼
雨上り小岩ひと跳び青蛙
早苗植糸騒ぎある子ら学校田

石川かおり

燕の子

伊藤 純子

ハイキングに降り立つ駅舎燕の子
梅雨籠ハードカパーの本抱へ
緑蔭の社交ダンスや楽高く
矢のさまに翡翠川面一撃す
この池が終の住処よ水馬
バーベキューに広場沸騰ばらの屋
白き花咲きつぐ狭庭梅雨に入る

瑠璃集

傘の店

五月雨に新装オープン傘の店
少年の背の広さや目高飼ふ
負けん気は曾祖母譲り杜若
冷蔵庫にレシビぺたぺたゆで卵
留守番の犬もストレス梅雨早

森下 康子

薫風

観世流の伝統まとふ夏装束
能面の目元涼しやをんな舞
薫風にしづまる寺苑無我の境
弾き終えて微笑む少女汗光り
湯上りや昭和の香る天瓜粉

小林 久子

夏来たる

狩野派の虎の咆哮夏来たる（狩野山楽・山雪展）
新樹光赤帽の児の鼓笛隊
ツーリングの若きカップル麦畑
薫風や江戸世なごりの松並木
北アルプス映す水面や早苗ゆれ

井口 淳子

花薔薇

薫風やとんがり帽の記念館（古関裕而記念館）
裕而の画く長崎スケッチ青葉雨
名曲を生めるオルガン花薔薇
病床で編みしロザリオ梅雨寂びて
筒鳥や南部こけしは素地のまま

田下 宮子

六月

六月が新聞受けの中にある
新妻として刻みぬるパセリかな
献立を知らせるメモや梅雨の夜
どくだみや告げないことの二つ三つ
青田波光の粒を放ちけり

常田 希望

八月号月評

塩路 隆子

桑の実や小川あたりの遊び場所

宮田 香

作者は自然の美しい安曇野梓川のご出身であることは句集「故郷」の「まえがき」にご紹介した通りである。豊かな山河に育まれた幼少の思い出に「桑の実」があり、「小川あたりの遊び場」があつたのであろう。丹波育ちの筆者にも同じ思い出が重なる。桑の実が熟れると紫色になり食べると唇が紫色に染まる。その汁が服に付くと洗濯をしても取れない位の色に染まり母に「また桑の実を食べた」と叱られたものである。掲句の「桑の実」の季語の選択も良しし、梓川の支流である雪解水を湛えた「小川あたり」が幼少の頃の遊び場、いまでも残っているであろうこの自然に再び触れたいとの思いを深くする句である。

王手てふ声緑蔭にひびきけり

阪本 哲弘

「人間の形状記憶盆をどり」で西東三鬼賞を取られた作者である。昔はよく見かけた風景であるが今でも時々お父さんと子供、おじいちゃんと孫の姿を見かけることもある。「緑蔭」であるから足元からは蚊取り線香が匂っている。時々ばたばたと団扇で蚊を払う音の他は将棋盤を

打つ駒の音が聞こえるのみである。無口に打つ二人の緊張の場面が続いていたが、突然「王手」と言う声が緑蔭に響いた。さて軍配はどちらに……。久方ぶりに味わう昭和の残像を覗く思いの句である。

馬上より放つ鏑矢青葉風

西垣 順子

糺の森を駆ける京都下賀茂神社の流鏑馬神事の一コマであろう。馬上より全速力で森を駆け抜けながら、鏑矢的を射ぬく射技である。的は方板を串にはさみ三か所に立てられ、それを馬上より矢継早に打ち抜くのが特徴であり、下賀茂神社の神事である。作者はそれに立ち会われた。まさに万緑の中「青葉風」が抜群の季語である。作者は笹鳴句会やひこばえ句会の他毎月の瓊の吟行にも積極的に参加されて、作句の技法を伸ばしておられる。余分なことを言わず省略の効いた作品、その格調の高さも窺える作品である。

(以下略)